

## 令和6年度 奈良市立青和こども園 研究実践概要

園長名 小林 尚子  
全園児数 126 名

1. 研究主題 心が動き主体的に遊ぶ子どもを目指して  
～明日に繋がる環境構成を探る～

2. 研究年度 初年度

### 3. 研究主題設定理由

人やものとの関わりの中で心が動き主体的に遊ぶ子どもを育むには、子どもの姿や経験していることを見取り、適切な環境構成や援助に繋げていくことが必要であると考えた。その為に、今年度は、子どもの興味や関心がどこにあるかを職員間で多角的に見取り、発達段階を考慮しながら明日に繋がる環境構成について探っていきたい。

### 4. 具体的な研究内容

#### ①研究のねらい

子どもの遊ぶ姿を保育者間で共有し、各年齢における子どもの興味や関心を見取り、明日に繋がる環境構成の工夫について探る。

#### ②研究の重点

- ・保育を語り合う時間を確保し、研究主題について職員間で共通理解を図るとともに、子どもの見取りを積み重ね、実践に繋げる。
- ・子どもの心の動きから興味や学びについて捉え、意図や計画性をもって環境を構成する。
- ・研修や教材研究を行い、「やってみたい」「もっとこうしてみたい」「明日もしよう」と意欲的に取り組んだり継続したりするような環境構成について探る。

#### ③活動の方法

【事例1】3歳児7月「今日もやってみる！」心が動いた瞬間 環境構成  
ねらい 泥や水を乗せたり流したりすることを楽しむ。

白くて大きいパネルを、ビールケースに立てかけて砂場の近くに置いておくと、パネルに、スコップなどをつかって泥を乗せたり、ペットボトルやバケツの水を流したりして、繰り返し遊んでいる。



職員間で遊びの振り返りをする

心が動いている・楽しんでいること	保育者の意図・環境構成
<ul style="list-style-type: none"><li>・水や泥が流れるおもしろさを感じている。</li><li>・水を流すことでパネルが白くなることを楽しんでいる。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・パネルを長くしたら、“流れる様子”を、長時間見ることができ、より楽しめるのではないか。</li><li>・水や泥を、パネルの上で存分に流し、色の変化や流れる様子を楽しんだりできるように、横に囲いをつける。</li></ul> 



翌日長くしたパネルを砂場の横に立てかけておくと、すぐに見つけたA児が「今日もやってみる」と、スコップで泥を何度もパネルに乗せはじめたあと、A児「先生、お水ジャーってして」と保育者に声をかける。①「Aくん、いくよー！」と声をかけ、水を流すと、泥が流れ、白いパネルが見えた。A児「消えた！」と言い、保育者の方を嬉しそうに見る。A児「先生もう一回お水やって」と言いながら、期待を込めた表情でもう一度泥をパネルに乗せ、保育者が水を流し繰り返し遊ぶ。  
A児と保育者のやりとりを見ていたB児C児もやって来て、泥を流して遊びはじめた。

<反省・評価>

- ・園内カンファレンスで子ども達の様子を写真を見ながら話し合う中で、子ども達は、水や泥が流れるおもしろさを感じたり、パネルが白くなることを楽しんだりしていることを見取った。より楽しむことができるように、パネルを長くしたり囲いをつけたりしたことで、A児の十分に楽しむ姿に繋がった。
- ・A児が楽しそうに保育者と遊ぶ様子がB児とC児のやってみたいという意欲に繋がった。

【事例2】4歳児7月 「みんなでつくろう！」  
ねらい 自分なりにイメージを膨らませ、保育者や友達とお家ごっこを楽しむ。

エピソード	保育者の意図
<p>テントの下で家庭の様子を再現しながら、友達や保育者と一緒にお家ごっこを楽しんでいた。「洗濯ものがあるから洗濯機がいるね」「そうだ冷蔵庫もつくろう」と話し、保育者と一緒に用意した段ボールやバケツ、布などの用具や素材を使って作っていった。「洗濯機はグルグル回るんだよ」A児が言うと保育者も「こんな風にするの？」と問いかけ「そうそう、こうやって回る」と周りの友達もイメージしたことを互いに伝えていた。洗濯機や冷蔵庫ができあがってくると「お家と同じになった！」と喜び、「一緒にお料理しよう」と友達を誘い合って遊んでいた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・落ち着いて遊ぶことができるように、テントを立て、遊びの一員となり会話をすることで、子どもの思いや考えを知りたい。</li> <li>・子どもとの会話の中で出たイメージを実現したいと思い様々な素材を探して準備し、問いかけながら作っていった。</li> <li>・本物に近づけていくことで子どもたちのイメージがさらに広がっていくのではないか。</li> </ul> 

2学期に入っても、友達と関わりながらごっこ遊びを楽しむ姿が見られた。



11月 「自然いっぱいのレストラン」  
ねらい 友達と思いを伝え合いながら一緒にレストランに必要なものをつくる。

子どもの姿	保育者の意図
<p>砂や泥を使ってごちそうづくりをしていた子どもたちがみんなで集めた自然物も取り入れて「どんぐりケーキができたよ」「葉っぱジュースです」と嬉しそうに友達と見せ合っていた。保育者が大きい机を用意すると、できたものを次々に並べていき、「なんだかレストランみたい。おいしいレストラン屋さんをつくろう」と嬉しそうに話した。保育者が「楽しそうだね。どうやってつくる？」と尋ねると「看板がある」「メニューもつくろう」と友達と相談し「先生、紙とペンをちょうだい」と保育者と一緒に、画用紙やペン、段ボールなどを準備した。「ごちそうにつける名札をつくるね」「レストランの看板はこれでいい？」と友達と作ったことを伝え合いながら作り始めた。お客さん用の椅子と机を準備したり、看板が出来上がってくると「レストランができましたよ」と周りの友達にも知らせ、お客さんやお店屋さんになりきってやりとりを楽しみながら遊ぶ姿が見られた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どんぐりなどの自然物に関心をもっていたので、楽しんでいたごちそうづくりに使えるのではと考え、子どもとともに整理して、使いやすいように置いておいた。</li> <li>・友達のつくったごちそうを見て自然物の使い方や工夫している様子が刺激となればと考え、互いのごちそうを見やすいよう大きめの机を準備した。</li> <li>・子どもたちに作り方や作りたいもののイメージがはっきりしていたので、必要なものを聞きながら一緒に準備した。</li> <li>・レストランが出来てくると、友達同士イメージも共有しやすくなり自分達で遊び始めたので、少し離れて見守った。</li> </ul>

〈反省・評価〉

- ・6月は、それぞれ一人ずつ作りたいもののイメージはあったが、実現する手立てや友達と伝え合うことが難しそうだったので、保育者も一緒に遊びながら思いを聞き出し、具体化できる手助けをしたことで、家庭を再現しながら遊ぶ姿に繋がった。
- ・11月には、できたごちそうからレストランをイメージし、これまでの経験から必要なものを友達と話し合い保育者に伝えることができた。また、友達同士を繋いだり、アイデアのきっかけをつくるなど保育者の関わりもあったことで、やりとりをしながらレストランごっこを楽しんだ。
- ・友達との伝え合いや、イメージしたものが出来ていく嬉しさ、面白さを十分感じる事ができた。

【事例3】 5歳児10月「私この曲で出るわ」

ねらい：友達の思いに気づき話し合っで遊ぶ楽しさを味わう。

子どもの姿	保育者の意図
<p>曲に合わせて踊るA児の姿に刺激を受けた数名の子ども達が集まってステージごっこをしていた。</p> <p>踊る順番で困っているB児やC児が「おもしろくない」と呟いたので、保育者が「困ったね。どうする？」とその場にいた子ども達を集め話し合いをした。B児が「順番がまわってこない」と言ったことから順番を決めることになった。保育者が「どんな順番にするの？」と尋ねるとA児は「初めは〇〇がいい」と話し、それに続き、B児が「〇〇で踊りたい」と話すとA児は「じゃあ、次は〇〇にする？」とC児に問いかけ順番が決まっていた。保育者が順番と曲名を画用紙にかいて貼ると「決まった！」「よかったね」と喜んだ。その時A児が思いついたようにペンをもち、「じゃあ私この曲で出るわ」と曲名の近くに名前をかき始めた。「踊る人も決めるの。いい考えだね」と声をかけるとA児が「Bちゃんはどうする？」と他の子に聞き、「踊るんやったらここに名前かいて」と言いながらペンを友達に渡していく。また「Cちゃんはどう？」とA児が聞くと「うーん、わたしはいいかな。この曲が踊りたいな」と踊りたい曲を自分で選び、名前を書いていく。自分達の順番が決まったところで「これをお客さんに見えるように飾っといたらいいんちゃう？」とみんなで相談し翌日ステージで踊ることを楽しみにしていた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・困っている友達のことをみんなのこととして捉え考えてほしいと思ひ話し合いの場を設けた。</li> <li>・話し合いを自分達で進めてほしいと考えきっかけになるよう声をかけた。</li> <li>・話し合いの内容を把握しやすいように、子ども達の決めた順番を紙にかくことでみんなに見えるようにした。</li> <li>・自分達で相談しながら決めていく姿を大事にしたいと思ひ、あえて声をかけずに側で見守った。</li> </ul>

〈反省・評価〉

- ・自分達で遊びを進めていたが、困っている様子には気づきにくかったので保育者が声をかけて気づきは話し合う機会をつくったことで、互いの思いを受け入れながら遊ぶ姿に繋がった。
- ・保育者が画用紙に曲順を書いたことで子ども達が話し合いの内容を理解することができた。また、声掛けのタイミングを図り、言葉を補ったり、側で見守ったりすることを意識したことで、自分達で話を進める姿が見られた。
- ・踊る順番を分かったことで、見通しをもつことができ、翌日を楽しみにしていた。

【事例4】 5歳児「映画館ごっこ」6月～11月

○ねらい ・友達と共通の目的をもち、遊びを進める楽しさを味わう。

・友達と考えを出し合ったり、役割分担をしたりしながら遊ぶ。

子どもの姿	保育者の意図
<p>ペーパーサートでつくった「ももたろう」の話を見せたいと映画館ごっこが始まった。遊びの後の話し合いで、「動かすところをもっと広くしたらいいい」「映画館って食べるものもあるよ」などと話し合いを重ね、それぞれ必要な物を考えてつくり映画館ができてきた。</p> <p>映画館を開店させると、登場人物の順番やどの役を誰がするのか分からなくなるなど困りごとがでてきた。そこで、遊びの様子をテレビに映しながら話し合いをすると、「絵の後ろに（登場人物の）名前を書いていたらいい」「出る順番に置い</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・困りごとが出てきたことで何とかしたいという気持ちはみられたが解決できなかったのでクラスみんな話し合いをした。</li> <li>・テレビを使うことで遊びの様子を共有で</li> </ul>

とく」などの意見が出た。次の日、保育者は、遊んでいる姿を見守りながら、「昨日どう決めた？」と決まったことを思い出せるような声掛けをした。子どもたちでペープサートの順番や役を決めたり、名前をかいたりして映画館ごっこを楽しんだ。

夏休み明け、民生委員の方に本格的なペープサートを見せていただいた。次の日から、再び映画館ごっこが始まり「鬼が島へ行くところは波みたいに動かしたらいい」「話が分かるように紙があった」など、ペープサートを大きくつくり直したり、舞台裏にペープサートを置けるように考え、さらに大掛かりな舞台が出来上がった。室内でしていた映画館を戸外でもやりたいと場所を移動させ、画用紙や旗立台など必要な物を準備し、看板をつくったり客席を用意したして、自分達で場を構成し遊びが続いていった。



きるようにした。

- ・考えたことを自分達で実現してほしいので考えきっかけになる言葉を伝えたり見守ったりした。
- ・民生委員さんとも相談し、遊びの刺激となるよう小道具や舞台裏などもみせていただいた。
- ・様子を見守りながら自分たちで遊びを進めていく充実観を味わえるように関わっていきたい

#### <反省・評価>

- ・遊びの振り返りを積み重ねたことで、子どもたちが意見や思いを出し合い考える姿につながった。その際、テレビやパソコンを利用することで、さらにイメージの共有ができ、他児が進んで意見を伝えたり共通の目的をもったりしやすくなった。
- ・困りごとをなんとかしたいが解決策が出なかった時に保育者が話し合いのきっかけをつくり、子ども同士の意見を整理して繋げたことで、友達の意見を受け入れながら新しい方法を見つけて遊ぶことができた。
- ・民生委員さんの本物のペープサートをみることで自分たちの遊んでいた姿と照らし合わせ「もっとこうしたい」と必要なものを考えてつくったり場を構成したりと意欲的に遊びを進めていく姿に繋がった。

#### 5. 研究の成果

- ・3歳児は、目に入ったものや人に対して興味や関心を示し遊び始める様子が見られ、自分なりのやり方で楽しんだり、事象を面白がったりする姿がみられた。また同じ目線で思いを受け止め一緒に楽しむ保育者の存在も大きい。保育者が遊びの一員となりながら、子どもたちが楽しいと感じていることを探り、存分に楽しめるようにするために必要なものや場を準備しておくことの大切さを感じた。
- ・4歳児は生活経験や知っていることを遊びの中に取り入れようとする姿が見られ、保育者が一緒に遊びながら子どものやりたいという思いを受け止め、見守ったり手助けしたりし、必要と考えられる材料や道具の提案をすることで、イメージが実現していく面白さを感じることができた。そして、本物らしくなることでさらにイメージが膨らみ友達と共有することができ、関わって遊ぶ姿に繋がった。
- ・5歳児は、困難に出会ったり「もっと良くしたい」と感じたりすることで心が動き、どうすればよいかをグループやクラス全体で話し合う場と時間の確保が大切である。その際に保育者が、タイミングを見計らったり必要に応じて関わり、意見を引き出したり話を整理する等、過不足のない援助を行ったり、話し合いを可視化して共有できる情報機器を活用したりすることで、子ども同士が思いを伝え合ったりアイデアを出し合いながら進めていくことができた。
- ・園内カンファレンスを積み重ねる中で、子どもの心の動きを多角的に見取り、次に必要と考えられる環境構成のアイデアを出し合った。担任1人では分からなかった気づきも多く、保育の幅が広がるとともに職員間で他クラスの遊びの様子の共有もでき園全体で取り組むことに繋がった。

#### 6. 今後の課題

コロナ禍に生まれ乳児期を過ごした子どもたちは、経験や人との関わりが少ない子も多く、わからないことや失敗が苦手な自ら環境に関わろうとしない姿が見られる。園での集団生活を通して心が動く体験を積み重ねられるよう、保育内容や環境構成の工夫を続けていくことが大切である。